

こだわらない強み

- ミクロネシア連邦モエン島の現状に対する島民の意識 -

原田 悠貴

北九州大学文学部人間関係学科

要旨

筆者はミクロネシア連邦チューク州のモエン島、デュブロン島において1999年と2000年の延べ2ヶ月に渡るフィールドワークを行った。ここで得たデータをもとにミクロネシアチューク諸島の現状について考察していく。

ミクロネシアは19世紀後半からスペイン、ドイツ、日本、アメリカの4カ国の国による植民地時代を経て独立したという歴史を持っている。これらの国の統治方法は様々であり、島民のおかれた状況も生活もその都度複雑な影響を受けた。

このような歴史を背景に、伝統社会も様々な形に変容しながら現在に至る。大きな変化としては貨幣経済の浸透、大家族制の崩壊、伝統的生活様式の変容が挙げられる。このことはチューク州モエン島、デュブロン島の食生活、ゴミ事情、酒事情、自殺率の急増などの現状を導いた大きな一因である。

これらの現状を先進諸国は「問題」と考えているが、モエン島民は「問題」と捉えてはいない。彼らは現状をあるがままに受け止めている。先進諸国や、近代化された社会で生きている人が憂うべき問題として考えていることはこの島の人間にとっては杞憂にすぎない。ここに島民の強みがあると筆者は考える。

目次

はじめに

- 第1章 ミクロネシア連邦、チューク諸島の概要
 - 第1節 ミクロネシア連邦 (Federated States of Micronesia) の概要
 - 第2節 チューク州、モエン島の概要
- 第2章 日本時代とアメリカ時代
 - 第1節 第一次世界大戦終了までの歴史
 - 第2節 デュブロン島の日本時代
 - 第3節 モエン島のアメリカ時代
- 第3章 モエン島、デュブロン島の現状
 - 第1節 家族構成
 - 第2節 食生活
 - 第3節 住居及び生活
 - 第4節 ゴミ事情
 - 第5節 仕事、収入について
 - 第6節 酒事情
 - 第7節 自殺について
- 第4章 植民地時代、独立を経ての変貌
 - 第1節 貨幣経済の浸透と家族のあり方の変容
 - 第2節 植民地時代と独立
- 第5章 考察 日本時代のデュブロン島とアメリカ・独立時代のモエン島
- 第6章 結論

はじめに

私がこのチューク州モエン島をフィールドに選んで行った際、たくさんの人から反響を得た。その多くが「何故わざわざあんな所に。」「危ないしろくでもないところだからやめておいた方がいい。」「すごいね、よく行ったね。」といった、驚きと批判が混じった声であった。汚いし、危ないし、何もなし、問題だらけだし、何でこの島を選んだのかと現地地で会った日本人の青年海外協力隊の男性は私に聞いた。グアム空港でもチュークなんか行かない方がいいと止められた。何故、チューク州、特にモエン島はこのような言われ方をされるようになったのであろうか。

第1章 ミクロネシア連邦、チューク諸島の概要

第1節 ミクロネシア連邦 (Federated States of Micronesia) の概要

ミクロネシア連邦は太平洋の西半、赤道の北側に沿って東西に帯状に分布している。カロリン諸島に属し、面積は701平方キロメートルで、ヤップ、チューク(旧名トラック)、ポンペイ(旧名ポナペ)、コスラエの4州から構成される。連邦自体は細かく数えると2000を越える島々からできており、国内最大のポンペイで334平方キロメートルと陸地面積は小さいが、この小さな島々が経度差にして約50度、東西2978000平方キロメートルに及ぶ広大な海域に点在している。

州都のある主要島はすべて火山島、隆起サンゴ礁島だが、その他はほとんどが環礁

島である。熱帯海洋性気候に属し、気温は平均28度で年間格差はほとんどない。雨量は6000ミリを越すポンペイ島から2000ミリ以下の環礁島まで様々。(小林泉 1986)

宗教はほとんどがキリスト教、言語は英語および現地の8言語で、島によって全く違う。英語は共通語として学校で習うが、日常生活では現地語が使われる。通貨は米ドルを利用し、経済面は貨幣経済と伝統的経済が混在している状況で、貿易収支は恒常的に赤字である。連邦歳入の約5割(連邦、州合計歳入の約7割)は自由連合盟約に基づくアメリカからの財政援助に頼っている。(ミクロネシア政府調べ)

第1節 チューク州、モエン島、デュブロン島の概要

チューク州はミクロネシア連邦4州のうちの一つで、もともとはトラックと呼ばれていたが、独立と同時に呼称を母国語の発音でという運動が起こり、現地語で“山”を意味するチュック、チューク州と正式に改名した。チューク州は周囲200キロメートルという世界最大の環礁に囲まれ、100あまりの島々で構成されているのだが、本論では国際空港のあるモエン島(現地名ワーロ、日本名春島)とその隣のデュブロン島(現地名トロアス、日本名夏島)でのフィールドワークをもとに述べていく。日常で使われる言語は現地語のチューク語で、英語は小学校から習うものの挨拶程度しかできない人が多いが、タクシーや店など公

共の場所では英語が通じる。人口は1994年政府調べでミクロネシア連邦105506人中53319人と連邦全人口のおよそ50%を占めており、人口は年々増加の一途をたどっている(表1参照)。

モエン島は第二次世界大戦後からチューク州の中心島になった島である。島には病院、郵便局、銀行、政府関連のオフィス、裁判所、ガソリンスタンド、大型ストア、テレフォンセンター(国際電話可能)、ホテル等がある。旧日本軍の通信基地や大砲、灯台なども残っている。港には毎朝、他の島から通勤・通学のために大勢の人がボートをとめ、夕方自分の島に帰っていく。道路はトヨタをはじめ日本製の中古車が数多く走っている。また電気は通っていて、島内電話がある家も多い。

デュブロン島は第一次世界大戦後第二次世界大戦終了までの日本の統治時代に中心だった島である。モエン島からボートで10分くらいで行くことができる。電話線はなく、電気も夜だけで、暗くなってきたらランプに灯りを灯す。道は基本的に草道で、車はパトカーを含めて島全体で数台だけのことであった。

第2章 植民地時代と独立の歴史

ミクロネシアはこれまでに4つの国々による植民地時代を経て、独立した。その間に各国の政策の影響を受けながら、近代化や貨幣経済が島に持ち込まれ、様々な文化の変容を遂げていった。そこでこの章ではこれまでの植民地時代の歴史と、それぞれの国の植民地政策の方針を見ていきたい。

第1節 第一次世界大戦まで

ミクロネシアにいつ頃から人々が住みだしたかは、はっきりとはしていない。人類学者や考古学者や言語学者を中心とするミクロネシアの先史文化の研究者たちは、アジア大陸で新石器時代を迎えたモンゴロイドの集団の一部が6000~7000年前頃より太平洋へと大規模な拡散を開始し、インドネシアからニューギニアとその周辺の島々に移動し、3500年前頃から海上を北上してミクロネシアの海域に入ってきたと考えている。

ミクロネシアがヨーロッパ世界に知られるようになったのは16世紀はじめのことである。最初の世界周航を達成するマゼランの率いたスペインの艦隊は、1521年グアムに上陸した。

その後スペインは太平洋に新しい植民地を求めて、多くの探検船を派遣した。中略 こうして十六世紀におけるスペイン人の航海によって、ミクロネシアの島々の存在が明らかになっていった。しかし、スペインはこれらの島々に格別な関心を示さず、正式に占領されたマリアナ諸島も、その後約100年間は放置されたままであった。(中山和芳 1987)

ミクロネシアでは、1830年代から、特にコスラエやポンペイへの来航が頻繁となった。島民との間に酒や銃などの品々、さらには悪疫も島々にもたらされた。1880年代に入って領土化の関心が生まれ始め、1885年にカロリン諸島をスペイン、1886年にマーシャル諸島をドイツ、ギルバート諸島をイギリスが領有するようになった。

スペインはカロリン諸島統治のためヤツ

プとボンペイに政庁を置き、役人や守備隊、カトリックの宣教師を派遣した。布教活動はコスラエとボンペイからしだいに広がっていき、島民はキリスト教を受け入れるようになっていった。

植民地化とは、武力を背後に控えさせてのキリスト教への改宗を通じて行われたということである。小松和芳は、ミクロネシアのヨーロッパ文化という異文化との交流は、キリスト教の強制という形を中核にして開始され、またそれは別の表現で言えば伝統的なミクロネシアの精神世界の破壊を意味していたと述べている（1993）。

その後1898年に米西戦争が起こり、破れたスペインはグアムをアメリカに割譲し、1899年にはグアム以外のマリアナ諸島とカロリン諸島をドイツに売却した。

スペイン統治の特色が島民へのカトリックの布教にあったのに対して、ドイツ統治の政策の中心はミクロネシアの経済発展にあった。コブラは南洋群島における主要な生産物であり、ドイツ政府は、島民に対して直接的間接的にヤシの栽培を強制し、コブラ輸出の増加をはかった。しかしミクロネシアは本国ドイツから遠く、かつその面積が狭小であること、また熱帯での生活はドイツ人が永住するのに不相当との考えがあり、さらには、19世紀の末ごろからドイツには様々な産業が急激に勃興して労働力の不足をきたしたこともあって、ドイツ人はあまり移住しなかった。最高でも250人程であったという（中山和芳 1987）。したがって、ドイツ統治下における経済の発展は大部分が島民の労働力に依存することになった。

第2節 日本統治時代 デュブロン島

第一次世界大戦終了から第二次世界大戦終了までを日本統治時代と呼ぶ。この期間のチューク諸島の中心はデュブロン島であった。

1887年頃から少しずつ日本人の商人がミクロネシア地域に移り住み貿易を始めていた。日本人は会社を設立し、各島に支店を設けて駐在員を置いた。駐在員の他にも蝶貝採取のために雇われた日本人漁夫も多数存在し、1912年の西カロリン、ペラウ、マリアナ諸島に関して言えば、在留邦人は73人にも達し、ドイツ人の105人に次ぐ勢力を有していた。（表4参照）

一九一四年八月、第一次世界大戦が勃発すると、日本は日英同盟に従って参戦、連合国側に立ってドイツに宣戦を布告し、十月には海軍南遣支隊が南洋群島を占領した。十二月より、南洋群島防備隊が群島の守備と統治にあたることになり、司令部をトラックにおいた。中略 一九二〇年、国際連盟は赤道以北の旧ドイツ領南洋群島を日本の委任統治領とすることを決定し、「南洋群島」は日本の領土の構成部分として、その国法の下に施政を行うことが認められた。中略 一九二二年には南洋庁を設置、これにともない群島の軍隊はすべて引き揚げた。南洋庁は本庁をパラオにおき、サイパン、パラオ、ヤップ、トラック、ポナペ、ヤルートの六つの支庁が設けられた。（中山和芳 1987）

日本は南洋群島の日本化という形で政策を進めた。民間時代といわれる1941年

頃まで日本人は産業発達のために島に会社を設立し、産業を興して輸出を増大させる経済活動に力を入れた。

南洋群島における邦人の経済活動は、南洋興発と南洋貿易の二大会社と官営企業によって支えられ、一九二三年以降は貿易において輸出が輸入を上まわった。ドイツ時代の財政が毎年歳入不足であったのに対して、日本統治に入ってから財政の発達はきわめて良好で、一九三二年度以降は、国庫補充金を計上せずに財政独立を達成した。

中略 この南洋群島の生産と貿易の増加は、日本人移民に負っていた。南洋群島が委任統治領となって以後、日本人人口の増加は著しいものがある(表参照)。中略 島民の労力は「能率を重んずる現代の産業には使用できない」(南洋興発社長松江春次)と日本人は考えた。ドイツ時代からひきついだリン鉱とコブラの生産は島民の労働力にも頼っていたが、日本時代に開発された製糖業と鯉節はほとんどすべて日本人の労働によるものであった。また、これらの重要品目は、ほとんどその全生産が群島外部に輸出され、島民の経済に直接関係することはきわめて少なかった。(中山和芳 1987)

労働力のほとんどを島民に頼っていたドイツと違って、日本は日本人の労働力を使って産業を興し、経済活動の促進に努めた。従って島民は産業における労働力とは見なされなかったのだが、代わりに日本人が購入する様々なものを生産し、売っており、ある種の経済効果はあったようである。

日本人商人は、島民からコブラ、ヤシ縄、象牙ヤシの実(ボタンの材料)、オオハマボ

ウ(ハイビスカスの一種)の繊維など多くのもの(現在ではコブラ以外商品価値がない)を購入した。さらに非常に多くの日本人移民の存在は、島民の栽培する作物の良いマーケットを形成したようである。パンノキの実、ヤムイモ、バナナ、たき木はもちろん、捨てていたヤシの殻まで炭にするために日本人は買ってくれたという。つまり日本時代には、伝統的生活様式をほとんどそのまま維持しながらも、たやすく現金(金額はわずかであるが)を手に入れる方法がどの島民にも開かれていたのである。日本人の手による経済発展で島民も恩恵を受けることができた。(中山和芳 1987)

このような話は実際に当時のことを知る年輩の方に聞くことはできた。

経済活動の促進と同時に、島民への日本語教育を筆頭に日本化への組織的な教育も行われた。島民のための公学校が設立され、島の子どもたちは8才から3年間公学校に通い、日本語の会話、綴り方、算数と共に「君に忠、親に孝」のいわゆる皇民教育を受けた。また、公学校を卒業後、優秀な生徒はデュブロン島にあった高校やその先のパラオに創られた大学に進み、土木、機械などについて学んだ。今でも島民の中には公学校で学んだ日本語を流暢に話すお年寄りもいる。

先ほど引用したように製糖業や鯉節は日本人の労働力によるものであり、島民の経済にはほとんど直接関係することはなかったわけだが、日本人の移住は島民の生活に多くの影響を与えた。

日本時代チーク諸島ではデュブロン島

が中心地であり、多くの日本人がこの島に住んでおり、当時は「日本町」として店が建ち並び、賑わっていたという。公学校で日本語を学んだ子どもたちの多くは日本人の下で店のボーイやメイドとして雇われ働いていた。当時公学校に通っていたお年寄りの方々と日本語で会話をした。彼らは当時のことをこう語ってくれた。

「日本時代は良かった。仕事もおもしろいことも珍しい食べ物も何でもあった。公学校で日本語の勉強をするのはとても楽しかったし、みんな学校が好きだった。働くのもおもしろかった。少しだけお金がもらえるので欲しいものはたくさん買えたり、服や食べ物は店の主人がよくしてくれた。」

「日本人は色々なものを買ってくれた。バナナでも野菜でもココナッツでも。だからみんな畑仕事をして売ってお金を稼ぐことができたんだ。」

「夜でも灯りで島は明るかった。お酒を飲んで一緒に歌を歌ったり、騒いで楽しんでいたよ。日本人はその下で働いていると良く面倒を見てくれた。」

と、当時が一番良かったと民間時代を振り返る声が多い。また、当時島に移住していた日本人の方にも話を聞いてみた。

「トラック（チューク）は第二のふるさと。もう一度行きたい。」

「かつてトラック島でともに暮らした島の人達は大切な友達。」

日本人も当時のことはいい思い出として胸に抱いているようである。実際20年ほど前からかつてチュークに住んでいた人達がツアーで島を訪れることが多くなってい

る。話を聞いた日本人も何回か再訪したと言っていた。

当時、島民は三等国民といわれる位置付けで、日本人との差別は明白であったが、島民の日本化への著しい抵抗は見られなかった。日本時代を好感をもって懐かしむ人々が現に少なくないが、これは、日本の新天地として長期的に住み込む覚悟で渡来した日本人や純粋な使命感に燃えて働いた公学校の教師たちが、個人レベルで地元民との友好的交流に果たした貢献度が大きかったといえよう。パラオ、トラックに日系ミクロネシア人が多いことも、極端な差別統治が行われていなかったことを物語っている。 中略

ミクロネシアにおける日本植民統治の形態は、台湾でのそれと同様に、一時的搾取対象としてではなく、完全なる日本化を目指していたという点で、イギリスやアメリカの統治対策とは基本的に異なっていた。（小林泉 1986）

驚いたことに日本に差別されたという言葉を私は一度も聞いたことがない。どこに行っても日本人大好き、日本人と関わりたい、という彼らであった。

しかし1941年に太平洋戦争がはじまると事態は一変した。「海の生命線」と呼ばれ、戦略的拠点となったミクロネシアの島々には、非常に数多くの軍人や軍属が来島し、島民は土地を奪われ、軍作業や食糧増産に使役された。戦争は4年間続いた。島のお年寄りの方も戦争中は大変だったと話してくれた。

「私は戦争の時は兵隊さんと一緒に働いた。戦争がひどくなると兵隊さんは食料を

くれないから多くの島民が水曜島へ引っ越したよ。パンの実やバナナ、ココナッツ、何もくれなかったから。昼間は勤労奉仕で軍隊で働いて、夜は防空壕掘ったり、畑仕事したり。働かなかったら罰でした。空襲があるときは寝られないし、たくさんの島民が日本兵と一緒に防空壕で死にました。」

「戦争の時は苦しかったよ。戦争中は食べ物みんな軍隊のものになったし、家もとられて、島民は山の奥にいた。夜は寝られないし、昼は軍隊の仕事。戦争最中はトラックの人をぶん殴ったりもしていました。」

「軍隊で働きました。各部隊に分かれて兵隊さんのお手伝いとか、伝令をすとか、まるで兵隊さんのようにやったんです。敵が来たら僕らもみんな向かうからね、僕らも軍隊になっちゃう、そうでしょ。例えば敵陣島陸すれば僕らは日本人と働いているから向かうし敵も僕らをねらうでしょ。僕らは軍人と同じなんですよ。」

戦争中苦しんで日本人からひどい仕打ちを受けても、彼らは日本のことも日本人のことも好きだと言う。何故かと聞くと、「あれは戦争だったから仕方なかったのだ」という返事が多く返ってきた。もちろん恨みを抱いている人もいるだろうが、島の多くは民間時代の後4年間の戦争があったにも関わらず、親日家である。

1945年、日本は敗戦した。チューク諸島はアメリカ軍に占領され、日本人は強制送還され、南洋群島の日本統治時代は戦争とともに終わりを迎えた。日本人時代は南洋群島の中心地として栄えていたデューロン島は戦争中の爆撃によりすべてを失っ

た。その後来るアメリカ時代は中心がモエン島に変わったため復興作業は行われず、今でもその残骸が草地の中にそのまま残っている。

第3節 アメリカ統治時代 モエン島

第二次世界大戦終了後、ミクロネシアはアメリカの信託統治領となる。それまでチューク州の中心はデューロン島であったが、アメリカ統治時代からはモエン島がその中心島になった。

一九四七年、南洋群島は国際連合の太平洋諸島信託統治領として正式にアメリカの支配下におかれた。第二次世界大戦後、全部で一の国連信託統治領が生まれたが、ミクロネシア諸島の場合だけ、他と違って「戦略区域」と指定された。 中略

一九四八年から六二年の期間、アメリカ政府の信託統治領への財政支出はわずかな増加を示しただけで、最高でも六〇年の六八〇万ドルでしかなかった。六三年度になるとこれがいっきよに倍以上の一五〇〇万ドルへとふえ、その後年々援助額は飛躍的に増大していった。 中略

アメリカの統治下では、政治的自治能力の育成に力が注がれた。一九五一年の民政移管後、各地区には公選制の地区議会がおかれ、さらに六五年には各地区選出の議員によって構成される、全地域的な立法機関であるミクロネシア議会も開設された。

これに対して、アメリカにはこの地域の産業の振興には成功しなかった。前述のようにアメリカは一九六三年以降毎年莫大な財政援助を続けてきたけれども、農漁業の

生産は停滞したままである。豊かなアメリカにはミクロネシアに対する経済的関心は無きに等しく、戦略的価値のみが重要であった。(中山和芳 1987)

島に滞在中、アメリカはお金をくれるからいい国だ、という発言を何度か耳にした。お金をくれてものを輸入してくれるから、いい国だ、と言うのだ。確かに先に挙げたように、アメリカは多額の援助金を出し続けている。かつて島が激しい台風に襲われたときすぐに援助物資として食べ物や衣類等を配給したという過去もある。これは軍事施設の用地を提供してもらう代わりに援助金を島民に提供するというアメリカによるミクロネシア政策の基本にのっとった動きである。1963年から援助額が急増したのも、ミクロネシアが戦略的重要地域として積極的な再評価がなされた結果である。そしてそのお金の大半が政府及び関連機関に務める人々の給与として支払われている。アメリカは島での産業振興は行わなかったため地場産業はほとんど育たなかった。また自給自足の伝統生活様式に変わり役人や、ストアで働く人々などの賃金労働者が増加し定着し始めたため、缶詰や冷凍食品の文化が急速に流入し、浸透している。島の消費物質のほとんどが輸入されたものという現状がここにある。

第3章 モエン島、デュブロン島の現状

筆者は1999年8月に1ヶ月間ミクロネシア連邦チュック諸島の中央に位置するモエン島に、2000年9月には3週間モエン島、1週間その隣のデュブロン島に滞在した。この時滞在中の家族を一例として

挙げながら、モエン島とデュブロン島の現状を比較していきたいと思う。

第1節 家族構成

まず、チューク州モエン島、デュブロン島において一般的な家族構成の例として、滞在中お世話になった大家族の家族構成を紹介したい。主にお世話になったのは8人兄弟の末っ子、カルロス(Carlos)一家と彼の兄弟姉妹の家族である。本論では「親と子供」という枠組みを家族、「一族」のことを大家族と呼ぶことにする。

32歳のカルロスとその妻26歳イオワナはカッサン(男8歳)、ニンネ(女7歳)、エンジョイ(男5歳)、ユウキチャン(男1歳)という4人の子供を持つ。ちなみにユウキチャンは一回目の滞在中の時に生まれた子供で、私の名前をつけてくれた。この子は生まれてしばらくするとノリアアの息子ケン夫婦に子供がいらないという理由で養子に出された。

長男ノリアアは一度目の滞在中に妻を亡くし、現在独身である。子供はK・N(男21歳)、ケン(男20歳)、ディサックリ(男14歳)、ドータ(女12歳)、マン(男9歳)、アニー(男7歳)、グローリア(女5歳)の7人で、一度目の滞在中の時はモエン島に住んでいたのだが、二度目の滞在中の時はデュブロン島に引っ越していた。また2000年6月には三男のディサックリが理由不明のまま自殺している。ケンはグローリア(21歳)と結婚し、ユウキチャンを育てている。

長女ノリアアは一度離婚後ガチタルという男性と再婚、5人の子供を持つ。リエラ

(女18歳)、ケイノール(男14歳)、ケノリー(男13歳)、ケノ(男11歳)、サノリン(女3歳)で、2度目の滞在の時に妊娠7ヶ月であった。

次男ローレンス、サニータ夫婦にはアンボック(男16歳)、スキーピン(男11歳)、スケーピン(男10歳)、ラッサン(男5歳)の4人の男の子がいる。2度目の滞在の時はA.M(男15歳)という親戚の子が通学のためにデュブロン島から来ていて一緒に住んでいた。

三男ケアレスはチンケレという妻と三人の子供、レイモン(男14歳)、ケーレン(男10歳)、ガタリーン(女8歳)と5人家族である。

次女ローズマリー、その夫マルソノの間にはタフリーン(女14歳)、ニッポ(女13歳)、ロミオ(男11歳)、ウィリーボーイ(男7歳)、ジョセフ(男2歳)の5人の子供がいる。2度目の滞在の時はタフリーンは違う島の親戚の家で暮らしていたが、私がモエン島に来たという理由で私の帰国まではモエン島に戻ってきた。

三女ノーリントは2人の子供がおり、長男イントン(男14歳)は知恵遅れの障害を持っていて、長女アキネス(女12歳)は養子である。彼女は2000年に再婚したばかりで、モエンからデュブロンに引っ越していた。

以上が私がお世話になった大家族の家族構成である。1度目、2度目のモエン島での滞在はカルロス家に、2度目の時のデュブロン島での滞在時は長男ノリアロと三女ノーリントにお世話になった。カルロス家と長女ノリアラ家は同じ家に住んでおり、

それ以外は一 가족ごとに自分の家を所有している。島では離婚、再婚は珍しいことではなく、血のつながりのない親兄弟も多い。また、A.Mやタフリーンのように通学等の理由のために親戚の家に世話になったり、またユウキチャンやアキネスのように養子に出されるといこともよく見られることである。誰の子供か、また誰と血がつながっているかということとはあまり重要視されることではない。

第2節 食生活

続いて食生活について触れたい。現在の食生活は伝統的食文化と近代的食文化が混在している状況である。特にモエン島では伝統的食文化が失われる傾向にある。その現状と理由を見てみよう。

島では伝統的食文化に米食や缶詰、インスタント食品や冷凍食品が入り込んでいる状況にある。ローカルフードにはパンもち、タロ、タピオカ、バナナ、ココナッツ、パイヤ、マンゴーなどがあり、時々海で魚を採り、家では豚、犬、鶏を食用に飼っている。またお金がある時は店で米、ツナ、ランチョンやサーティンの缶詰、インスタントラーメン、冷凍肉などを購入している。現在では米が主食に変わり、家庭によってはパンもちなどを面倒だという理由で作らなくなったという。また、子供がローカルフードより米を好むため食費がかかって困るという声も多数耳にした。まずはモエン島のローカルフードを紹介する。

ココナッツミルク... 椰子の実が地面に落ちてしばらくたったものをコブラ

という。そのコブラの中の白い部分を削ったものを水でこし、それを火にかけてスープ等に調理する。サーティンの缶詰やほうれん草、魚などを一緒に煮込んだスープはシチューのような味がした。またココナッツミルクにマカロニと大量の砂糖を加えたマトウンと呼ばれるものもよく食べていた。

パンもち...日本語でパンノキと呼ばれる木の実を採って、調理したもの。主に二通りの食べ方がある。一つ目はKonといって、切つてゆで、皮をはぎつぶして水やココナッツミルクを混ぜたもので、3日はおいしく食べられるとのこと。もう一つはEpotという。まずパンの実を切つてゆで、3、4ヶ月間土の中に埋めておいて、必要なときに必要な分だけ取り出す。その後練りつぶし、水と時々ココナッツミルクを加えどろどろになったものをパンノキやバナナの葉で包んで鍋で蒸したもので、1~2週間は保存がきく。特にEpotは保存性が高く、また少しのパンの実にたくさん水を混ぜることで大量の食料を作ることができるため利点大きい。私も試してみたのだが腐敗臭と酸味が強く、また一日おいただけでも腹痛を起こすのであまり食べられなかった。

タロイモ、タピオカ...皮を剥いてゆで、練りつぶして食べる。

バナナ...水やココナッツミルクでゆでて食べる。もしくはゆでる前にすりおろし、水と砂糖、食紅を混ぜてビニル袋や葉に包んで蒸す。

魚...朝、夜に海に網や銚で採りに行

く。生で醤油をつけて食べたり、焼いたり、ココナッツミルクで煮る。小さな魚は塩に漬けて長持ちさせながらご飯のおかずにする。

以上が島の代表的なローカルフードだが、ここでモエン島とデュブロン島での滞在中の数日間の食生活を紹介したいと思う。

まずはデュブロン島での食事から紹介する。一週間の滞在だったのだが、モエン島を離れる前に家族から、「デュブロン島にはストアも食べる物もないから一週間分の食べ物を買っていかないといけないよ。」と言われた。そのためモエン島のストアで缶詰やインスタントラーメン、そして米と飲み水を買ってデュブロン島へ向かった。島では家族が食べている物と同じでいいのだからと言って、買って来た物を三女ノーリントに渡し、食事の面倒はすべて彼女にみてもらった。

2000年9月17日

朝...ラーメン

昼...ご飯、サーティンの缶詰

夜...タロイモ、ご飯、缶詰

9月18日

朝...ラーメン

昼...ご飯、ツナ缶、ふりかけ

夜...ご飯、バナナ、魚、ココナッツ

9月19日

朝...ご飯、サーティンの缶詰

昼...タピオカ、魚

夜...タロイモ、タピオカ、ご飯

以上がデュブロン島での食事である。デ

デュブロン島は夜しか電気が通わないため、家電製品はほとんどない。そのため朝から火を焚いて食事を作る。島には大型ストアもなく、また家族にお金もないため、食事にはローカルフードが多い。朝食のラーメンは私が自分で買って来た物である。缶詰は一缶1ドル50セントほどで、一缶で数人分のおかずになるため、モエン島に出かけた人間が時々買ってくるのとことであった。

続いてモエン島での食事を見てみよう。

2000年9月8日

朝...スクランブルエッグ、パン、コーヒー

昼...ご飯、ツナ缶

夜...パンもち、コブラ、ターキーテルのバーベキュー（火であぶったもの）

9月12日

朝...ご飯、ウィンナ1本

昼...ご飯、ランチョンミート

夜...ご飯、スープ（魚、インスタントラーメン、サーティンの缶詰を混ぜたもの）

9月14日

朝...ラーメン

昼...ご飯、ラーメン

夜...ご飯、ココナッツミルクのスープ（サーティン、ほうれん草入り）

9月23日

朝...ホットケーキ、コーヒー

昼...ご飯、ランチョンミートの缶詰

夜...ご飯、ターキーテル（七面鳥の冷凍肉）のスープ

以上がモエン島での4日間の食事だが、他にも店で購入したドーナツは月に3回程度、また冷凍チキンも一ヶ月滞在中に7回程度は食卓に上がった。パンを買うと3日はパンの日が続き、ラーメンを買うと、ラーメンの日が続く。マカロニを購入してから数日間は昼食にウトン（マカロニのココナッツミルク煮）が続いたこともあった。パンもちも時々作るが、基本的に毎食米も炊くので皆好きな方を食べていた。またお金があるときはインスタントコーヒーやお菓子を買うこともある。1度目の滞在の時はソフトドリンクをよく飲んでしたが、2度目の時は家族にお金がなかったのか、家族がソフトドリンクを飲んでいる姿を見かけなかった。のどが渇くと男の子が椰子の木に登り、ココナッツを採って飲ませてくれた。島には野菜や果物が少なくビタミンが不足がちなので2、3日に一度はココナッツを飲んでいく。

デュブロン島には個人経営の小さな店しかない。また島にはモエン島以上に仕事がないため、家族における現金収入がほとんどないので輸入食料に頼らずにローカルフードを食べる伝統的食文化が残っている。一方モエン島には大型輸入ストアがあり、様々な外来食料が流入している。現金収入のある者は完全に輸入米に缶詰や冷凍食品に頼るという不自然な食習慣が横行している。

実際ローカルフードを一切作らなくなって米と缶詰だけの食生活を営んでいる家庭も多くなったとよく聞いた。滞在先の家族は比較的ローカルフードを作って食べていると島に住む日本人に聞いていたが、前述

した食事のメニューからも分かるように米と缶詰の食事は多い。家族の現金収入は少ないので（これに関しては後で述べる）米や缶詰を買うお金がなくなると次の収入時まで Epot を作り魚をとりに行くなど、ローカルフードを食べて過ごしていた。

第3節 住、及び生活

ここでは滞在先での日常生活を例に挙げながら、モエン島、デュブロン島の生活を紹介していく。家は基本的にコンクリートで造られている。一つの家に2～5つほどの部屋があり、家によっては二つ以上の家族が同じ屋根の下で生活している。滞在中私は7、8人の子供たちと同じ部屋で雑魚寝していた。電気は通っているが時々停電する。その時は皆でランプを囲んで過ごす。就寝はだいたい20～21時頃で、起床は6時前後であった。

トイレは家から離れたところにあり、排便の時だけ使う。排尿は家のまわりで行う。シャワーは水が出てくるパイプを水道として、そこで水を汲んで浴びる。朝と夕の1日2回でシャンプーや石鹸も使う。複数で浴びるのだが、基本的にはパンツ一枚で、時々はスカートをはいたまま身体を洗い、全裸で浴びることはまずなかった。

毎日の洗濯は女性の仕事である。特に学校へ行かない10代の女の子が担当し、大量の洗濯物を川や風呂場で洗濯洗剤とたわしを使って何時間もかけて洗う。

平日、子供たちは学校へ行き、夕方帰宅後は外で遊び、夕食をとり就寝する。学校へ通うかどうかの選択は自由である。学校へ行かない男の子は、時々大人について、

薪とり、タロ畑の世話をを行い、それ以外の時間は自由に過ごす。女の子は洗濯、食事作り、幼い兄弟の世話をする。この大家族では母親の多くが仕事を持っているため、彼女達は朝ご飯の用意をしてから仕事に出かけ、帰宅後夕飯の準備をする。男性は基本的に家で時間を過ごし、必要に応じて薪とり、タロ畑の世話、パンもち作り、魚採り等に出かける。

キリスト教を信仰し、毎週日曜日には正装で教会に向かう。

島では伝統文化と近代文明が混在している。パンもちやココナッツミルクを作るときは昔ながらの木製の器具を使用している一方、テレビ、ビデオ、炊飯器、電気コンロなど様々な家電製品等も使用されている。近くの家に集まって大勢でビデオ観賞する光景は珍しくない。

言語はチューク語で、第一次世界大戦後から第二次世界大戦終了までの日本統治時代に日本人が島に持ち込んだものが外来語としてそのまま使われている。例えば、でんき、でんわ、うんどうかい、はたけ、はんずぼん、おべんとう、がっこう、せんせい、びょういん、こしまき、はだし、きゅうり、ほうれんそう等が挙げられる。また、子供たちの遊びの中にも、「げんこつ山の狸さん」によく似たものや、貝殻のおはじき、石のお手玉、木のツルの縄跳びなど、日本の懐かしい遊びを垣間見ることができた。

第4節 ゴミ事情

モエン島での生活の中で印象的だったことの一つにゴミのことがある。ここでは生

活に密着した問題として、ゴミ事情に触れたいと思う。

まずデュブロン島だが、この島にはあまりゴミの山はなかった。もちろんゴミが捨てられていた所はあったものの、普段あまり物を買わないため、ゴミが出るような生活を行っていないからだ。

一方モエン島には至る所がゴミの山であった。ビニル袋、段ボール、ビン、缶など様々なゴミがあちこちで目についた。ゴミが出る割には家の中にゴミ箱はなく、出たゴミは所かまわず投げ捨てられる。家の中や周囲は一日数回ほうきで掃いて掃除をするのだが、集めたゴミは川や道の脇に捨てる。ゴミにはビニル袋や紙、缶やビン等が含まれている。ある女性に訊ねてみた。

私「川がゴミでいっぱいになったらどうするの？」

女性「雨が降ったら流してくれる。」

私「それでも溜まってしまったら？」

女性「火を付ければ紙とビニルが燃えるから大丈夫。」

この女性のような考え方は多くの島民に共通している。

この家の隣を流れる川では野菜や魚を洗うだけでなく、洗濯も行われる。上流でも下流でも、川のそばに住んでいる家々では川と密着した生活が営まれている。その結果、各家を通過しながら、上流から下流へとゴミや生活排水が流れていく。

島で働いている日本人の海外青年協力隊の人にこのゴミのことを話すと、彼が仕事でこの川に関わっていたという話が出てきた。人々が川にゴミを捨てることで川がせ

き止められ、上流では川の水が溢れ家が水につかるという事態が起こった。彼はその状態を改善する仕事を請け負ったらしい。

しかしその上流に住んでいる人達は家が水浸しで使えないからと別に家を造って住んでいたとのことであった。

島にある Environmental Protection Agency (環境保護庁) は「ゴミ問題は年々深刻化している。ゴミを処理する場所も経済力も知識もなく、島がゴミだらけになっていて環境問題にも発展し、アトピーの子供も増えてきた。車や家電製品などの輸入は増加の一途をたどっているが、一度壊れたら修理できる人が島にはいないのでそのまま粗大ゴミとなり、道端や海に放置されていくのだが、今のところどうしようもない。」と説明している。実際に島で唯一のゴミ捨て場に足を運んでみたが、明確にゴミ捨て場だと区切られてもいない場所にトラックがゴミを運んできて捨てていく光景を目にした。ゴミ捨て場は島の中心からは離れた所にあり、行く途中にも何台もの車が投棄されていた。その廃車はそばに住んでいる家庭の洗濯物干し場として利用されている。

Environmental Protection Agencyはこのゴミ捨て場について二つのプランがあると言う。

「一つ目は、今飽和状態にあるゴミ捨て場のゴミをプレスして小さくし、子供が入らないように柵を作ってからゴミの回収システムを作る策なのだが、それにはお金がかかる。その案の実行はいつになるかわからない。もう一つのプランはアメリカか日本

がゴミを持っていってくれること。日本に帰ったらそう頼んでおいて下さい。そうだ、日本はゴミで島を作ったでしょう？」

「夢の島のことでですか？」

「そう、それ、それを作ろう。日本人にできたのだから私たちにもできるはず。名前もそうしよう！」

経済的にも技術的にも実現は難しい話であるが、彼らは本気だった。彼らは、「島の人達は誰もゴミの問題性に気づいていない。それを理解し、懸念しているのは大学で勉強してきたこの事務所の私たち2人だけ。」と主張していた。島の人々がこの島中に溢れるゴミをどう捉えているのかが気になったのだが、誰に聞いても「ああ、汚いねえ。」と顔をしかめるだけだった。

船着き場では車や機械のスクラップを積み船をよく見かけた。島には捨てる場所がないという理由で、多くのスクラップを随時小さな無人島や沖に投棄していると言う。島で観光業を営む日本人の方に話を聞いてみると、環礁の内から外に流れる海水は一目で汚染されていることが分かるとのことであった。

第5節 仕事、収入について

次に仕事、現金収入について見てみたいと思う。植民地時代を経て近代化が浸透し、貨幣経済も浸透してきた。しかしチューク州では仕事がないとよく言われるのが現状である。1994年のミクロネシア連邦の中で全人口における現金収入を持った人々の割合を見てみると、ポンペイで2.85%、コスラエで3.74%、ヤップで4.68%であるのに対し、チュークでは1.84%

と、チューク州だけ2%にも満たない。米や服、日用品を購入するために貨幣が必要となってしまった今、現金収入がないと何かと不便な社会が訪れている。米や缶詰を買わなくても食べ物には困らないが、ものを手に入れるには現金が必要不可欠な時代になった。これまで土地や家、現金収入がある所に支援を求めて人が集まってくる傾向があった。モエン島には遠い環礁外の人が開拓した地域があるが、その出身島から多くの家族が土地と家を求めて移住してきたため、一つの集落が形成されるまでになったという話だ。そのようなことはあちこちで見られる。実際私が滞在した大家族もとはデュブロン島出身で、カルロス一家がモエン島に移り住んで家を建て仕事を始めてから他の家族も移住してきたとのことであった。

基本的に夫婦に子供数人が一家族として存在し、その中で一人、二人が現金収入のある仕事に就いていれば比較的よい。大家族で数えると数十人にもなる大家族の中で数人が働いていれば米や缶詰、日用品を購入できる。もちろん時代の流れとともにお金の重要度が高まってきたこともあり、収入がないからといって支援を求めることが簡単ではなくなってきた。これによって大家族のあり方も変容してきているのも事実である。さてここで実際滞在していた家族の収入源、および家庭内外の仕事を見てみたいと思う。

カルロス一家

カルロスはトラックオーシャンサービスという日本人が経営している会社で、必要

なときのダイバーのガイドをしているが、ダイバーが来る時期だけしか仕事はない。イオワナは2度目の滞在中に仕事が見つかり、店で働き始めた。次男エンジョイはモエン島と一緒に暮らしているが、長男カッサンと長女ニンネはデュブロンで小学校に通っている。魚取りやパンもち作り、タロ畑の世話やたきぎ取りなどはカルロスの役目で、洗濯はイオワナが働き始めてからはノリアラの娘リエラに頼んでいる。

ノリアロー一家

一度目の滞在中に奥さんを亡くした彼は仕事をしておらず、2度目の訪問の時にはデュブロン島に引っ越していた。デュブロンの方がお金がかからないからという理由らしい。20歳、21歳のK.Nとケンという息子がいるが2人とも働いていない。K.Nはモエン島でカルロス達と暮らしており、時々カルロスと共に山や畑や海で仕事をしている。ケンは結婚していてデュブロンに住んでおり普段からモエンと行き来している。

ノリアラー一家

ノリアラが島で一番大きいストア(TTCストア)でレジをしている。家での女の仕事(洗濯、食事作り)は長女リエラの仕事だが、リエラは高校に通っているのではなかなかすることができず大変そうであった。幼稚園から帰ってきた次女サノリンの世話もリエラが見ている。男の子はみんな学校へ行っておらず、長男のケイノールはカルロスや父ガチタルと一緒に畑や山での仕事を手伝っている。

ローレンス一家

妻サニータがTTCストアの事務をして

いる。彼女はグアムに住んでいたこともあるらしい。ローレンスも時々カルロスと一緒に畑仕事をしているが、普段はあまり動いていない。男の子ばかりで娘がいないので洗濯や食事作りが大変だとサニータはこぼしていた。

ローズマリー一家

ローズマリーは毎日昼過ぎまでホテルで働いている。夫マルソノはカルロスと同じガイドをしているので時々しか仕事はないが、その時の収入は自分と比べようがないほど高いと彼女はよく言っていた。家事は学校に行っていない次女ニッポが担当しているが、マルソノもよく食事作りや子供の世話も見ている。先述したが、2度目の滞在中に他の島に引っ越していた長女タフリーンは私が来たということで2週間はモエン島に戻ってきたので、その間はニッポと家事を行っていた。

以上が現金収入と仕事についての家族の状況である。大家族の中でデュブロン島に住んでいるのは長男ノリアラ家と三女ノーリタ家である。1度目の滞在中の時はモエン島に住んでいたのだが、2度目の滞在中の時はデュブロン島に引っ越していた。この二家族には現金収入を得ている者が一人もいない。そのこともあって伝統的食文化を保っていてお金のかからないデュブロン島に引っ越したのであろう。

また、滞在中にチュークの男は働かない、という話をよく聞いた。男は酒を飲み酔っぱらうか、遊んでばかりで何もしないというのだ。実際前述したファミリーを見ても、定期的な現金収入があるのは女性ば

かりである。カルロスもよくお酒を飲んで仕事から帰ってきたイオワナを怒らせていた。最近はタロ畑を放置し、パンもちなどは一切作らずに米と缶詰だけの生活をしている家庭が増えているとのことである。青年海外協力隊の人がお世話になっている家も例にもれず、いつも食事はご飯と缶詰だけで、時によってはご飯だけということもあるらしい。

上記したとおり、定期的な現金収入を得る職についている男性は関わった大家族にはいない。しかし彼らは家で仕事はきちんとこなしている。ではこのような山、海、畑での仕事をしない家庭では彼らのような立場の男性は何をしているのであろうか。あちこちで話を聞いてみたが、最近の若い男は特に何もしていない、という答えが圧倒的に多かった。遊んでばかり、酒を飲んでばかり、食べてばかりだと非難的な声が相次いだ。米や缶詰、冷凍食品など輸入食料の普及によって、これまでは漁業や農業に従事してきた男達が町でぶらぶらするようになったのだ。

就職に対する意欲の有無に関わらず、島に現金収入の得られる仕事が少ないのも事実である。働きたくても働けない、という人もたくさんいる。高校や大学を卒業してもこの島では安定した収入を得られる職がない、と島を出る若者も多い。優秀な人材が海外の大学を卒業後にチュークに戻ってこないということは島の政府事務所でも聞いた。

「10年ほど前までは、大学を卒業した幸運なマイクロネシアの若者達は、島に戻れば

仕事待ち受けている状況でした。1975年に信託統治領の予算が上限に達し、政府職員数の増加がこれ以上は望めないと分かった後でさえも、その後3年間の米政府プログラムの急増が、大学新卒者に新しい雇用機会を提供していました。ところが、1979年になりプログラムの多くが中止され、資金提供が急速に下降に向かい、深刻な就職難時代がやってきました。1970年代半ばに生じた第二次、第三次の米国大学への脱出組が島に戻るようになると、彼らの多くが、大学の卒業証書が期待に反し、政府職員のポストを約束するものではないことを知り絶望感を抱きました。島に戻ってきた卒業生の数があまりにも多いのに対し、雇用があまりにも少なかったのです。おそらく、大学卒業生以上がっかりしたのは、古い島の伝統を守らなくなるかもしれないというリスクを犯してまでも、は育は仕事、給料を得るとともに、家族にとっても物質的な繁栄をもたらす確実な手段であるとの考えのもと、子供達を送り出した両親であったと思われます。」(フランシス・X・ヘーゼル、S・J 1989)

第6節 酒事情

アルコールも、近代社会とともに浸透していったものの一つである。最初にマイクロネシアを訪れたヨーロッパの人達が、島にワインや蒸留酒を持ち込むまではマイクロネシアにアルコール飲料はなかった。その後島民の中でアルコール摂取による喧嘩や暴力行為が多発するようになり、1885年から統治諸国は飲酒を禁止するという政策をとった。スペインは飲酒禁止に厳格では

なかったが、ドイツ、日本はアルコールの全面禁止を厳しく行い、その後アメリカも同様に飲酒禁止の政策を維持していた。1959年からパラオでビールの販売が認められてから他の地域でも法律が改正されていったが、チュークは今でも禁酒政策は解かれていない。しかし現状ではバーや店でアルコールの入手は簡単である。

モエン島の男達の酒癖の悪さは島内だけでなく、グアムや他の州でも有名である。チューク州出身者がアルコールを摂取し、暴力問題などを引き起こしているからである。モエンに向かう途中グアム空港で一泊したのだが、そこで話しかけてきた人達に、モエン島に行くと言ったら止めた方がいいという忠告を受けた。酒癖が悪い、人柄が悪い、と言うのだ。まさかと思いつながら島に来て生活を始めたが、予想以上に男達の酒癖は悪く、身の危険を感じることも何度かあった。その体験を幾つか紹介したい。

1999年8月下旬夜

夜部屋で皆と話をしていると、吠え声のような男性の声とパン！という音が聞こえ、場が静まり返った。しばしの沈黙の後会話が戻ってきたが現地語で静かに話しているため私は理解することができず、英語で何が起こったのかを尋ねてみた。すると近くにいたおばさんが何気ない感じで「Bud Guy, Bud Guy(悪い男よ)」と言いながら手で拳銃の形をしてみせた。私が驚いて「Gun?(拳銃)」と聞くと「そうよ、でも心配ないわ、酔っぱらいだから」と笑って答えられた。

2000年9月14日夜

女の子と何人かでシャワーの準備をしていたとき、叫び声と共に部屋の中に緊張が走った。酔っぱらいだと判断したりエラ(18歳)がすばやく電気を消す。少し様子を見てリエラとタフリン(14歳)、ニッポ(13歳)の4人でシャワーに向かった。が、その途中でまたもや大きな吠え声が出て、私は彼女達に名前を呼ばれながら腕を引っ張られるように部屋に走って逃げ、普段はかけない鍵を玄関でかけた。外にいた男の子達も各家に逃げ込んだようだった。その後シャワーは途中だったのでもう一度戻ったが、なるべく声も水音も立てないように素早く浴びて、早々に部屋に帰った。

2000年9月29日昼

男達が酒を飲んでいて、「ゆうき(筆者)も一口どうだ」としきりに勧めるので少しだけ口に含むとかなり薄い焼酎だった。が、女で酒を飲んだということで彼らが騒ぎ始めた。この日飲んでいて男達は酔って暴れたりする方ではないものの、やはりうつろな目からんでくる。こういう時は女性のそばにいるのが一番安全なので、珍しく仕事が休みだったお隣のローズマリーの家に行き事情を説明すると、好きなだけいいとのこと。彼女は酒飲みが大嫌いで、酔っぱらいから逃げなかったために殺されそうになったこともあるそうだ。

2000年10月1日昼

デュブロン島に滞在したときにお世話になったノリアロがモエン島の家で酔っぱらって暴れ出した。長い棒を持って家の周り

を叫びながら歩き回った。目に付いた人の名前を叫んでは追いかけるので皆近づいてきたら必死で逃げる。ノリアロの目は正気のものではない。私は見つかったらどうなるか分からないということで、イオワナがこっそり奥の部屋に匿ってくれた。部屋の鍵をかけ、窓にはカーテンを引き、しかも人影が映らないように窓よりも低い体制で座り息を潜める。先日食べた犬にあたって吐き気がおさまらない私は部屋の中で息を殺しながらも吐いていた。それでも静かにしておいて部屋を出てはいけないとイオワナに言われた。

上記以外でもモエン島では酔っぱらいの男性を目にするのは日常茶飯事であった。酒を飲み、理性や正気を失った顔で叫びながら石を投げたり、棒を振り回して歩く男性は珍しくなかったが、近くに来ると走って逃げるものの、少し離れたところにはすぐに人だかりができるほどに面白がられるといった感じであった。走っている車の中にはフロントガラスが割れたものも多いのだが、その理由は酔っぱらいか椰子の実の落下のどちらかだということである。

最近ではアルコールを購入する費用のために窃盗や強盗をする若者も増えているという。また島の逮捕者のほとんどが、アルコール飲料を摂取した上での暴力行為、破壊行為であり、飲酒は深刻な問題とされている。

この飲酒における問題だが、モエン島では深刻であるが、デュブロン島では酔っぱらいを見かけることはなかった。滞在期間が短いということもあったであろうが、デュブロン島に住む人達は基本的にお金がな

く、また、アルコールが購入できるような場所も島にはないということが大きな理由であろう。

第7節 自殺について

ファミリーの中で1度目の滞在の時に一緒に山に行った男の子、ディサックリ(14歳)が2度目訪れた年の6月に自殺をしていた。彼は夕方普通にバスケットを楽しんでからいとこ達とふざけあった数時間後、木にひもをつるして首をつっていたのを発見されたのだ。家族、親戚、友人の誰にもその理由は分からず、その日までも変わったことも悩むことも見られなかった彼の突然の自殺に、家族全員が驚き悲しんだとのことである。

友人であるレベッカ(21歳女性)は、「最近自分の周りでも自殺の話がよく聞きます。結婚を親に認めてもらえないことを苦にして男の人の方が自殺したというのはよくあることだし、あとは...親と喧嘩したとか、何か嫌なことがあったとかで。結構問題になっているみたい。」と話してくれた。「結婚を反対されて自殺する女の人はいないの?」と聞くと「女の子の自殺はあまり聞かない。」という返事が返ってきた。

フランシス・X・ヘーゼルとS・Jは、チューク諸島が太平洋地域で最高の自殺率を記録していると論文で述べている。

ミクロネシアで自殺率が目立って上昇し始めたのは1970年代の初期だった。ここで「ミクロネシア」とはマーシャル諸島、パラオ、ミクロネシア連邦(ヤップ、ポナペ、トラック、コスラエ)を指す。中略
70年代初期には自殺率は10.8%ま

で上昇し、70年代半ばには21.7%へと急増し、80年代初期に28.2%でピークに達した(表3参照)。その後70年代後半とほぼ同じ水準である25.8%まで下落した。このようなデータを全体的に見ると、70年代を通して自殺率が急増し、90年代に入ってゆっくり落ちた、と言える。ミクロネシア全体の自殺率の推移と、ミクロネシア最大の群島であり、私の研究対象であるトラック諸島の自殺率の推移が非常に類似していることは特筆に値する(表4参照)。

ミクロネシアの島々における自殺率は時期によって大きな相違が見られるが(表4参照)自殺に関しては共通の特徴がいくつかある。どこでも圧倒的に男性の自殺者が多く、男女比は11:1になること。自殺者は若者が多く、自殺者の平均年齢は22才で、自殺者の60%近くが15才から24才であること(Rubinstein、印刷中)。自殺率の上昇がはじまる前と比較して年齢や性別による差が大幅に縮小されたこと。自殺率の上昇が始まる前は、男女比は3:1から5:1であり、平均年齢は30才前後だった(Rubinstein、印刷中)。過去10年間にトラック諸島では、最もリスクの高い、15才から24才までの男子では自殺率が人口10万人当たり70人から206人に増えた(Rubinstein、印刷中)。最も一般的に使われる自殺方法は首吊りだ。立ったまま、あるいは座ったまま輪の中に頭を入れて前に倒れ、酸素不足で死にいたる、というパターンである。ほとんどの島でも首吊りによる自殺者が80%を越える。(フランシス・X・ヘーゼル、S・J 1

989)

第4章 植民地時代、独立を経ての変貌

何故モエン島とデュブロン島が第3章で挙げたような現状にあるのかを考えるにあたって、まずこれまでの文化の変容について見てみたい。植民地時代に伴う近代化に伴い伝統社会の崩壊が起こっている。長い植民地時代を経て独立したチューク州で大きな変容をとげたであろう2点に特に注目してみる。

第1節 貨幣経済の浸透と家族のあり方の変容

植民地化され、異文化との交流をするにあたって、最も重要な変化は貨幣経済の浸透であろう。事实现金社会が伝統的生活様式に与えた影響は大きい。太平洋地域の社会でも100年以上前から通貨は使われていたが、中心は伝統的経済であった。島の経済基盤は自然であり、自然からの収穫物をもとに大家族で生活を営んでいた。ミクロネシアの生業は農耕と漁撈が基本であり、大家族の中で男女それぞれ協力して作物の栽培、収穫、調理、または漁撈を行い、分配するなど大家族全体で動いていた。子供たちも大家族の中で一緒に育てられた。家族とは単に親と子、という枠組みでなく、一族、という経済単位として機能しており、土地を中心に生計を立てていた。ミクロネシアは母系社会である。土地は代々女性が継承し、結婚すると夫の姓へと変わり、夫と自分の土地に住む。最近ではあまり見られないが、名前を書く際は、女性は自分の土地を表す名前もともに明記する習慣もあったという。このような母系社会を中心に

大家族は協力、支援しあって伝統的生活を営んでいた。

しかし、貨幣経済の浸透はこの伝統的生活様式に大きな変容をもたらした。現金社会が訪れたことによって、人は現金収入の仕事を求めるようになった。現金収入を得ての生活が浸透するに従って、これまでの協力しあう「大家族」という共同体が存在し続けることが困難になった。土地を所有する家族に支援を求める必要もなくなり、親と子供だけから構成される家族が、自分たちで食べるものを確保しあい自分たちの現金で必要なものを購入する時代が来た。大家族にとって重要であった土地さえも、今では現金目的のターゲットとなり、土地をめぐる裁判が後をたたない。

もちろん、昔のような大家族が消滅したわけではないであろう。重要な社会的グループとして「一族」という枠組みも存在し続けているが、日常生活上はかつてのような権限や影響力は持たなくなった。

私が滞在していたカルロス家もエリアス一族であるカルロス兄弟を中心とした大家族の中の一族であった。各家は別々にあるが中心を囲むように建てられており、子供たちは自由に行き来していた。葬式の時は皆で集まって夜通し準備を行い、日頃からパンもちやタロいもの生産、収穫、調理、分配は男達が協力して行う。しかし貨幣経済による核家族化は見てとることができた。缶詰はカルロス夫婦が、ノリアラが大量購入して管理し、ファミリーの中で必要な時に売買される。現金は各家族で管理され、お金の相互援助は見られない。

現地では子供がよく歌う童謡に「こっちに

来てご飯を一緒に食べましょう。」「今私お腹いっぱいなんです。」「そうですか、私のことを嫌ってくれてありがとう。」という歌詞がある。通りがかった小鳥をフクロウが見つけて食事に誘うというものであるが、食事を断ったら嫌だったということにつながっているこの歌からも分かるように、チューク諸島では古くから周りの人皆で食事をとるという習慣があった。今でもその習慣は残っており、食事をする時に近くにいる人は誘われるのが普通である。食事が近い時間に人の家を訊ねると、必ずといっていいほど食事に誘われた。しかし現在では大家族ではなく、基本的には食事も個々の家で行われる。各家族で現金収入を得て店で食料品を購入する社会になると同時に、台所が各家庭に一つずつ存在するようになったからだ。共同作業による大勢での食事という形も失われつつあるのだろうか。

また、子育てに関しても核家族化の傾向にあった。1度目の滞在中イオワナが出産した。皆祝福はするが、子育てに関わろうとする姿勢は見られなかった。子供の躰でも、怒ったり叱るのはその子の親か、年上の子である。小さい子が年上の兄弟、いとこに怒られる姿は毎日目にしていたが、親が自分以外の子供を叱るという光景はあまり見られなかった。子育ては本来大家族の中で行われてきたのだが、現金社会の影響もあって核家族化が進み、子供は両親のみ育てられるようになった。これまでは大家族の共同作業であった子育ての負担が、一気に両親の肩にかかることになったのである。子供は親と密着した生活を営み、親族間での結びつきが薄れ、両者とも大家族

制の時に受けていた親族からの支援を得られなくなったため、親子間で摩擦が起こった時に家族内での対処ができなくなっているのが現状である。

貨幣経済の浸透、そして伝統的経済の崩壊に伴って家族のあり方も以上のように大きく変容してきたということが言える。

第2節 植民地時代の歴史と独立

前述したようにミクロネシアは4カ国もの国による目まぐるしい植民地時代を経て独立したという歴史を持っている。これらの国の統治方法は様々であり、島民のおかれた状況も生活もその度様々な影響を受けた。大きな変化におけるもう一つの点はこの植民地時代から独立という歴史から見る事ができよう。

スペイン時代はキリスト教の布教を行った。ドイツは経済発展に政策の中心をおいたが、移住したのはわずかで島民の労働力に依存していた。次に日本は統治時代、日本化政策を進めた。日本語教育を行い、島民の数を超す多くの日本人が移住して産業の発達に努めたが、ドイツと違って日本は日本人の手によって貿易や産業を行った。4年間の戦争を終え、ミクロネシアはアメリカの統治下におかれる。アメリカ政府は軍事目的の用地とする代わりに援助金を交付したが、産業には無関心だったために島の地場産業は停滞した。

伝統的な生活様式を保っていたこの島に、植民地時代この国々は沢山のものを島に持ち込んだ。宗教、産業、教育、物資、とその種類は多岐に渡る。ここで注目したいのは、伝統文化と異文化や近代文化との交流

とは、植民地時代に始まり植民地時代に行われたということである。ミクロネシアは植民地時代、統治国の政策のもとにあった。異文化や近代文明に触れ、それを受け入れての伝統的生活の変容も、先進国の統治下で流れていた。植民地時代の中で、島の伝統や状況は急速に変化していった。つまり近代化、貨幣経済の浸透、それに伴って起こり始めた諸問題などはこれまではすべて諸国の庇護の下に統制されていたと言っても過言ではないだろう。そんな中、ミクロネシア連邦は独立を果たした。現代の国に対する知識、経済力、統制力、対応能力も持たずに独立してしまったのではないだろうか。だからこそ、様々な問題が引き起こされているのではないだろうか。

第5章 日本時代のデュブロン島とアメリカ・独立時代のモエン島

第2,3,4章と歴史、二つの島の現状、これまでの社会変容について述べてきた。この章ではデュブロン島とモエン島、この二つの島がそれぞれ日本統治時代、アメリカ・独立時代の中心島であるということから、この二カ国の統治方法の違いを比較しながら、これまでに述べてきたことをふまえて現状とその理由について考えてみたい。

第2章第3節で述べたが、第一次世界大戦後第二次世界大戦終了までミクロネシアは日本の統治領であり、日本はミクロネシアの日本化政策を進めた。チューク州ではデュブロン島が中心となり、多くの日本人が移住し、「町」として島は栄えた。この時日本人は産業を興し多くの利益を上げたが、労働力はほとんど日本人であり、島民への

影響と言えば日本人が買うために島民が作物を作って売り、少しのお金を手に入れていたということである。ここで押さえておきたいのは、日本化政策のもとでは伝統的食文化や伝統的経済はある程度保たれていたということである。作物を売って得たお金で様々なものを買ってはいたものの、ローカルフードという伝統的な食文化の上に成立する経済であった。そのため大家族制や伝統的経済は島民の生活に根付いていた。第二次世界大戦でデュブロン島は激しい空襲を受け、島の建物や日本人が作ったものは崩壊した。その後アメリカ・独立時代は中心がモエン島に移り島の復興作業が行われなかったため、デュブロン島にはほぼ完全な伝統的生活様式が戻ってきたのだ。

一方モエン島は第二次世界大戦後アメリカ統治の中心地となり、急激な速さで近代化が進んだ。アメリカは軍事目的、行政組織の拡大、それに伴う政府雇用者の増大で莫大な財政援助を行った。その結果、アメリカの財政援助に依存する貨幣経済がミクロネシアに形成され、ミクロネシアのアメリカ依存体質は強化されたのである。アメリカは土地問題などが理由で産業を興すことには失敗し、代わりに輸入を大幅増とし、島には電化製品や食料品などの輸入品が溢れることとなった。そんな中での独立である。

植民地時代と独立、そして第4章で述べた近代化と社会変容をふまえて考えると、第3章の現状の多くが説明できる。まずは食生活から見よう。

デュブロン島、モエン島の食生活は第3章で述べたとおりである。デュブロン島は

伝統的食文化を中心に生活が営まれている。島にストアも仕事もないからだ。一方モエン島は現金収入に支えられた社会となっている。現金収入のある仕事をする代わりに大型ストアで現金と引き替えに輸入食料を購入するという生活になっている。食生活については第3章第2節を参照して欲しい。

次にゴミ事情について見ていく。そもそもチュークの人々の中に「ゴミ」という概念がないのではないかと筆者は考えた。近代文明が持ち込まれるまでは、ヤシの皮やバナナの葉など、すべてが地に還るものであった。島の人々はそのような自然物と同じように同じ感覚で、ビニル袋やビン、缶を川や道に捨てる。島では近代文明が入ってくるまでは本来「ゴミ」を「ゴミ」として認識する必要がなかったのである。考え方、感じ方までは近代化されていないということであろう。急速な近代化に対して教育が追いつかず、環境や衛生に対する教育も不十分であると同時に、独立して間もないミクロネシア政府には経済力や統制力がないため、ゴミの回収システムの設立や、ゴミ処理を行うことができていないのもゴミ問題の大きな理由の一つである。また、モエン島では現金社会が訪れたため、島民が現金で輸入品を購入する頻度が高くなっていき、それに伴い、ゴミが大量に出るようになったのも原因の一つと言える。デュブロン島は大型輸入ストアがなく、また島に仕事もお金もないため比較的伝統的生活が行われており、ゴミが出る量が少ないのだ。

続いて仕事についてだが、元々は現金収入を得る機会のなかった社会である。自給

自足という伝統的経済社会に現金社会が介入してきたのだが、島には目立った産業がないために工場や店といった人手が必要な職場は少ない。モエン島の多くの家族が現金収入に頼った生活を送っているために、仕事不足が問題となっているのである。一方デュブロン島は日本統治時代が空襲とともに終わりを迎えてからも基本的に伝統的な食文化を保っている。貨幣経済も流入してはいるが、島では現金収入の得る機会がほとんどないからである。ここでも日本とアメリカの統治政策の違いが明らかに見受けられる。

モエン島の酒問題は年々、深刻化しているというのが、一般的な考え方である。統治下にあった時は禁酒政策が徹底されていたのだが、独立したミクロネシア政府にはそんな強制力がない。また貨幣経済が浸透してアルコールを購入する費用を手に入れやすくなったということも影響し、島の若者達がお酒を手にする機会は増えた。島には娯楽がなく、食文化の変容から若い男達の家族内での仕事がなくなり、エネルギーを発散させる場がないのも理由として挙げられる。小松和彦氏は、統治下に入る以前はチューク諸島地域の島々は島内の村と村、あるいは島と島との間で戦争を繰り返しており、男達はその戦士としてまず育てられたという伝統が今日まで続いていると述べている。日本統治時代は日本の青年団組織を導入しその若者のエネルギーを青年団活動に注がせることに成功した。しかしアメリカ統治時代になるとアルコールや麻薬、銃器が自由に手に入るようになり、その攻撃性やエネルギーが暴力行為、破壊行為に

向けられるようになったという。確かに若者のエネルギーを発散させる場所がないというのがモエン島において大きな問題であろう。今後、柔道を取り入れた教育を行うなど、その対策が練られている。

最後に自殺率の急増についてだが、ミクロネシアにおける自殺の理由をいくつか挙げてみると、「父親に5ドルもらえなかった」「空腹だったのにご飯が用意されていなかった」「帰りが遅くなったから親に怒られる」といった非常に些細なことが自殺の原因となっている。家族との長期に渡る摩擦が些細なきっかけによって衝動的な自殺につながるパターンがミクロネシアでは多い。ここで重要なのは第4章第1節で述べた家族のあり方の変容が関係しているということである。子育てに関して従来は大家族、親族が非常に重要な役割を持っていた。子供は一族の中で育てられ、多くの人々が支援を提供して、緊張が見られる時にもそこでうまくバランスがとれていた。しかし貨幣経済の浸透とともに大家族制が崩壊し、核家族化が進むにつれ、両親と子供の関係の緊密化、親の権限の拡大へと向かった。親との間に緊張が走っても支援する者はおらず、またかつては大家族の中で悩み相談の相手もいたのだが、今は逃げ込む場所がないのが現状である。家族内での解決のつかない困難な問題の解決方法として自殺をあげる人達もいる。このような植民地時代を背景とした大家族制の崩壊が自殺率の急増大きな一因になっていると言えるであろう。

ミクロネシア、チューク州のモエン島、デュブロン島は植民地時代、独立を経て、

様々な形でその文化や習慣を変容させてきた。その結果が、島の現状となって現れているのではないだろうか。以上のように各現状をそれぞれ見てきても、その歴史性との因果関係は否定できない。むしろ重要視しなければならないことであるだろう。

第6章 結論

このように植民地時代を経て、独立したミクロネシアではその歴史故に様々な分野における変化とそれに伴う問題を抱えてきた。なぜこの島がこうなってしまったのか。それを説明するには植民地時代という歴史とそれに伴う伝統社会の変容をふまえずにはいられない。しかし、モエン島は問題が多い、何故こんな問題が起こったのか、この先どうすればいいのかと先を懸念するのは日本やアメリカといった先進国や、海外での教育を受け、近代化された生活に身を置いた人達である。島の人々は何も気にせず、伝統と近代が混在している社会に生きている。ゴミが溜まろうとも、伝統文化が失われようとも、貨幣経済が浸透した結果家族のあり方が変容し、自殺が増えようとも、それらを問題視するのではなく、ありのまま見ているように思われる。原因追及や改善する意志がないのではなく、それ以前に彼らはそのことを「問題」と捉えていないのではなからうか。そもそも、貨幣経済も、大家族の崩壊も、ゴミも酒もすべて自分たちがもたらしたものではない。植民地化され、統治する国が独自の政策を進め、勝手に近代文化を持ち込んだのである。彼らは彼らの伝統的に培われた価値観のもと生きている。彼らの感じ方としては、そ

の状況や現状を「問題」として捉えるのではなく、ありのままをありのままの形で置いておくということは無意識に行っているのではないだろうか。

今まで挙げてきた現状も、先進国からすれば「憂い解決すべき問題」と捉えるであろうが、島の人達がそれを「問題」とさえ見ていないとすれば、現状に対する考え方に大きなギャップがあるのは明らかである。

そして何故同じ歴史を経てきたにも関わらずチューク州だけがどうしようもない、問題だらけの島だと言われるのか。他の州に比べて先進国の考え方、価値観に染まっていないからではないだろうか。他の州は海外の大学で様々のことを学んだ若者は島に戻り、産業や観光業の発展における経済活動の向上を目指したり州で近代的な教育に力を入れているが、チュークにそのような動きはない。島が食べ物に豊富であることからお金がなくても生きていけるという安心感が島の人々にはあり、また、近代化に染まっていない昔ながらの感覚で生きているところにその理由があると思われる。この論文でも何度か「問題」という言葉をためらいながらも使用した。しかし島の人達は何も「問題」だとは見ていないとすれば、例えばアメリカが財政援助をやめるとどうなるか、などという心配も、先進諸国だけのものであろう。アメリカの財政援助が止まったら確かに混乱はするかもしれない。しかし近代化に完全に身を置いてしまった公務員等の一部の島民には難しいかもしれないが、多くのモエン島民は多少戸惑

いながらも再び大家族制や伝統的食文化、伝統的生活様式に戻るのではないかと私は考えている。モエン島の普段の生活ではお金がない時はパンもちやタロいもを作り、漁撈に励む。お金がある時は米や缶詰、冷凍食品を購入している。例えば財政援助が止められたとしても、アメリカはお金をくれるからいい国だと言うモエン島の人々にとっては、前者のお金がない時の生活が続くにすぎないのである。

井上 小林泉 大沼久夫 1986(社)
ミクロネシア教会オセアニア研究所

参考・引用文献

「ミクロネシアにおける若者の飲酒」 フランス・Xヘーゼル 1982

「自殺とミクロネシアの家族」 フランス・Xヘーゼル 1989

「自殺を防止するために何が出来るか？」 フランス・Xヘーゼル 1989

「危機に瀕した文化：今日の太平洋地域に見る潮流」 フランス・Xヘーゼル 1993

「ミクロネシア政府は何故機能しないのか？」 フランス・Xヘーゼル 1998

「オセアニア世界の伝統と変貌」 石川栄吉編 1987 山川出版社

「オセアニア現代辞典」 編者 高橋康昌